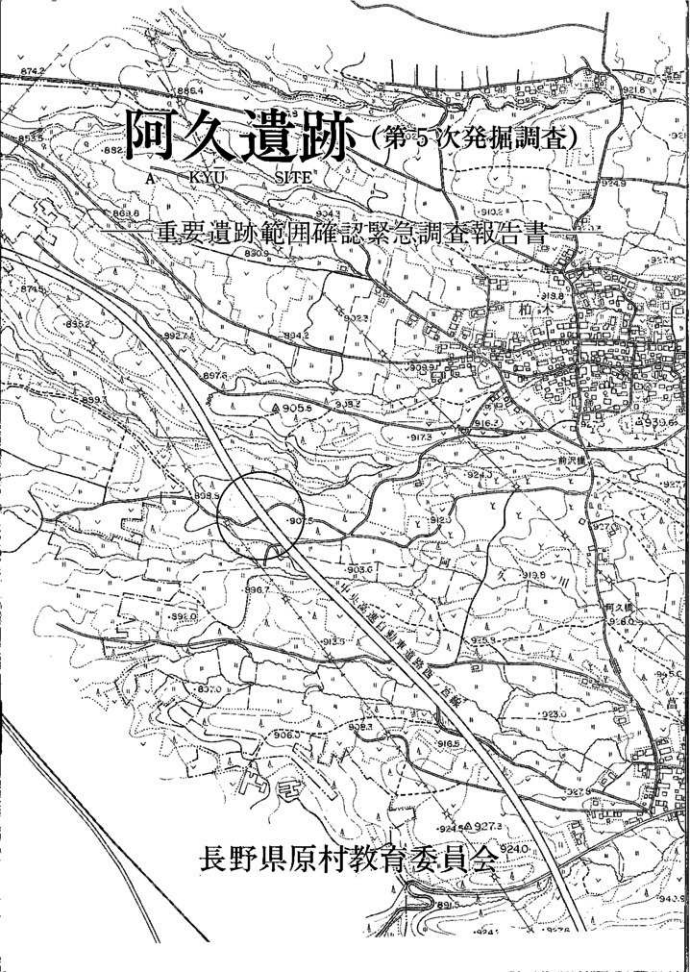


阿久遺跡 (第5次発掘調査)

A KYU SITE

重要遺跡範囲確認緊急調査報告書



長野県原村教育委員会

序

阿久遺跡は、中央道の建設にともなって長野県教育委員会が実施した3次にわたる発掘調査によって、縄文時代前期の環状集石群や多くの住居址が発見され、その規模と内容において全日本的にみても稀有の大遺跡であることが明らかになりました。そうした中で村民をはじめとして長野県考古学会や県内外の研究者・市民の間から遺跡の保存を訴える声が増え、広範な保存運動が展開されてきたことは周知のとこであります。そして昨年（昭和53年）5月には文化庁より「土盛り保存」という最終案が示され、これ以降は国史跡の指定に向けて動き出すこととなりました。

このたびの第5次調査は、史跡指定のための基礎資料を得るために原村教育委員会が実施した遺跡範囲確認緊急調査です。調査は真夏の猛暑の中、県教育委員会の第4次調査と併行して行ない、数多く設けた試掘坑により阿久尾根全域に大きく遺跡が広がっていることが判明しました。

この成果に基づいて教育委員会としては昨年9月、史跡の指定を文化庁に申請し、10月には国の文化財保護審議会において念願の国史跡指定が決定となりました。

調査にあたっては、文化庁・長野県教育委員会の指導を受け、長野県中央道遺跡調査団からは多大な御協力をいただきました。また名簿に載せたように数多くの方々のお世話になりました。更に地元の柏木区及び地主の方々には御理解と御協力を賜りました。ここに厚く御礼申し上げます。

昭和54年3月

原村教育委員会

教育長 松 沢 達



目 次

I 発掘調査に至る経過	1
II 発掘調査の経過	1
III 阿久遺跡の第5次発掘調査	3
1. 遺跡の位置と環境	3
2. 範囲確認調査とその成果	6
(1) 試掘グリッドの設定	6
(2) 土 層	6
(3) 遺構の検出状況	8
(4) 遺物の分布範囲	9
3. 出土した遺物	12
(1) 石 器	12
(2) 土 器	13
(3) 石製品	16
IV 結 び	16
図版 1～6	

例 言

1. 本書は国及び県の補助金を受けて実施した、長野県諏訪郡原村柏木字阿久・塩木に所在する阿久遺跡の重要遺跡範囲確認緊急調査（第5次発掘調査）の報告書である。
2. 発掘調査は、原村教育委員会が昭和53年度阿久遺跡調査会及び阿久遺跡範囲確認調査団を編成して行なった。
3. 本書は、平出一治・岩崎孝治・三上徹也・五味一郎が話し合いのもとに共同執筆した。また、図面の作成・トレース及び遺構・遺物の写真撮影は平出が担当した。
4. 本調査の出土品・諸記録は原村教育委員会が保管している。

第5次発掘調査関係者名簿

昭和53年度阿久遺跡調査会

顧問	小林庄吉 (原村長)	宮坂栄康 (原村議会議長)
会長	牛山勝雄 (原村教育委員長)	
副会長	宮坂高三 (原村助役)	清水正造 (原村議会副議長)
理事	上島博光 (原村文化財調査委員長)	小松幸麿 (原村議会・阿久対策委員長)
	清水宏一 (原村議会議員)	北原徳一 (原村教育委員) 宮坂一次 (同)
	菊池光茂 (同)	小林勇藏 (原村文化財調査委員) 日達友久 (同)
	牛山重秋 (同)	秋山健樹 (同) 牛山武雄 (村史編集委員)
	高橋友重 (同)	清水勘司 (土地所有者代表) 長林 斌 (同)
	清水久一 (同)	篠原 進 (同) 小林久男 (柏木区長) 千野久義
		(長野県教育委員会文化課長) 大沢和夫 (調査団長) 宮坂光昭 (調査
		副団長) 森嶋 稔 (調査員) 戸沢充則 (同) 武藤雄六 (同)
	事務局	松沢 達 (事務局長 原村教育長) 行田竹輝 (事務局次長 原村教育次長)
		堀内久徳 (原村教育委員会事務局社会教育主事) 平出一治 (同職員)
	牛山いさ子 (同職員)	

阿久遺跡範囲確認調査団

団 長	大沢和夫 (長野県考古学会会長)	々	
副 団 長	宮坂光昭 (長野県考古学会阿久遺跡保存対策委員長)		
調査主任	平出一治 (原村教育委員会事務局)		
調 査 員	森嶋 稔 (長野県考古学会事務局長)	戸沢充則 (長野県考古学会)	
	武藤雄六 (同)	小松公明 (同) 宮坂虎次 (同) 鶴飼幸雄 (同)	
	会田 進 (同)	高林重水 (同) 長崎元廣 (同) 岡田正彦 (同)	
	武居幸重 (同)	遠藤令仁 (同) 唐木孝雄 (同) 市沢英利 (同)	
	赤羽郁夫 (同)	林 茂樹 (同) 宮沢恒之 (同) 神村 透 (同)	
	中島豊晴 (同)	高橋 桂 (同) 岩佐今朝人 (同) 由井茂也 (同)	
	原田勝美 (同)		
	調査補助員	折井 敦 (明治大学大学院研究生)	三上徹也 (明治大学考古学専攻生)
		渡辺儀調 (同) 内田利生 (同)	
	調査参加者	今村善興 笹沢 浩 青沼博之	岩崎孝治 佐藤信之 山下泰男

小沢由香利	山田武文	矢口忠良	福島邦男	松永満夫	三村 肇
山越正義	市村勝己	白田武正	百瀬長秀	和田博秋	平出政子
篠原ふくよ	清水しげ子	牛山いね志	長林ときわ	堀内おこの	
清水としみ	芳沢つねよ	小林せき子	芳沢光世	長林みね子	
清水 了	清水つねゑ	小林ミサ	中村ふさゑ	松沢正二	林やす子
清水千代子	清水たけよ	堀内よしえ	堀内美江	清水たつみ	
牛山きよの	鎌倉たけみ	田中よし子	小林初江	清水さわの	
笠原隆光	小林波次	小林美映	平林一三	小林巻美	藤原禮子
五味けさき	藤原智恵子	宮坂美智恵	小林静子	宮坂とし子	
長田秋子	木下とくよ	藤原千文	牛山とく子	今泉かめ子	
五味文男	秋山きみゑ	五味ふさ子	五味かずゑ	五味彦彦	
藤原節子	牛山ひるゑ				

(順不動)

I 発掘調査に至る経過

阿久遺跡では、中央道西宮線の建設に伴って昭和50年度から52年度まで3次にわたる調査が、長野県教育委員会の長野県中央道遺跡調査団によって実施された。そして第3次調査の過程で遺跡の重要性が強く認識されるところとなり、保存を訴える声が村内外に高まっていった。この間、文化庁・県教育委員会・原村・柏木区・公団・長野県考古学会の間で保存に関する協議が何度も行なわれた。また、マスコミもこれを大きくとり上げ、長野県考古学会では署名運動や県民集会の開催も行なった。

こうした経過の中で何通りかの保存策が検討されたが、昭和53年5月、文化庁から最終案として「土盛り方式」が示され、当初の掘り割りの計画から道路下に半永久的に保存されることになった。この決定により、次は遺跡全体の保護策としての国史跡指定へ向けて具体的に動き出すこととなる。そしてそのためには、①遺跡の範囲、②環状集石群の範囲、③縄文前期を中心とする各時期の範囲、などを正確に把握する必要があるため、範囲確認調査を計画した。調査は国及び県の補助事業である「重要遺跡範囲確認緊急調査」として行なうこととなった。これが今回の第5次調査である。

II 発掘調査の経過

昭和53年6月28日 昭和53年度阿久遺跡調査会及び調査団発足。

7月8日 調査団会議を諏訪教育会館にて開催する。調査の目的と方法及び日程、

予算、調査人員等について細かな打合せを行なう。

- 7月10日 7月16日まで発掘調査の準備。
- 7月17日 発掘調査開始。現地は山林であり、試掘区も広い範囲に及ぶため地元柏木区の作業員と、調査員、補助員にて下ヤブ刈りをしながら試掘グリッドの設定を行なう。19日までにB-D、F、T、U区のグリッドを設定する。
- 7月20日 全作業員にてグリッドの掘り下げに入る。なお、21日まではA、E、H、K、X、Y区のグリッド設定も併行して行なう。
- 7月23日 7月3日から、本線部分の第4次調査を行なっている中央道遺跡調査団から休日を利用して応援に来てくれる。この日、DG76グリッドから滑石製の丸玉出土。この日以降、トレンチ部分(DE76~DK76、DV75~DX75、DB86~DB92、DN85~DN90、BJ77~BW77)から多くの礫が出土し、環状集石群の範囲が徐々に判明する。また、FD24グリッドからは中越式の一括土器が出土、住居址の可能性が出てくる。
- 7月24日 X、Y区の掘り下げ。後期の土器片が若干出土する。前期の遺物は一片もない。
- 7月29日 掘り下げも主要部分を終り、土層断面の記録に入る。29・30日と中央道調査団の応援がある。
- 8月4日 実測終了グリッドから埋めもどしを始める。
- 8月5日 中央道調査団、土曜の午後半日、作業の応援をしてくれる。
- 8月7日 作業員の作業終了。
- 8月12日 多少の実測作業を残すものの調査はほぼ終了する。



写真1 埋めもどされた阿久遺跡（左の松の木の根元が立石列石の出土地点）

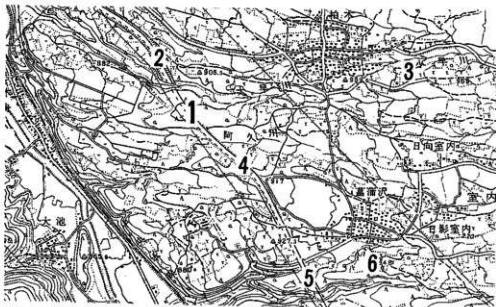
III 阿久遺跡の第5次発掘調査

1. 遺跡の位置と環境

阿久遺跡は、八ヶ岳西麓の諏訪郡原村柏木^{かしらぎ}にあって、柏木集落の南西約500mに位置している。遺跡は東の八ヶ岳から流下する大早川と阿久川という2本の小河川（宮川の支流）によって北と南を浸蝕された、東西に細長い台地（通称“阿久尾根”）の上にある。標高は905m前後を測る。尾根の南斜面は比較的なだらかな傾斜をもっているのに対し、北の大早川側はかなり急な斜面となっている。

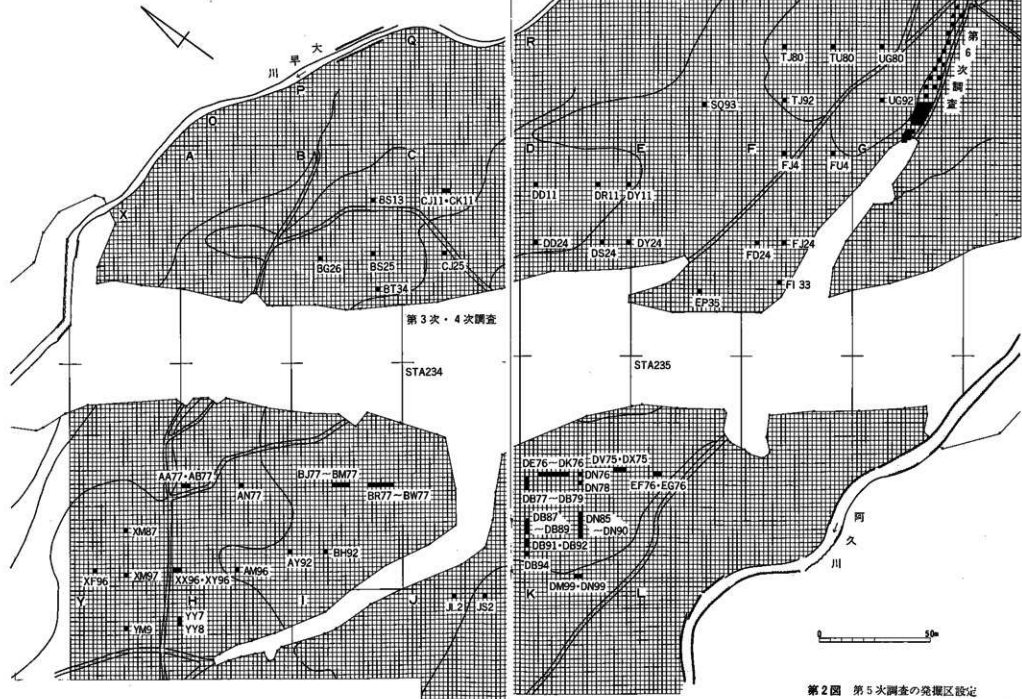
阿久尾根は遺跡のある部分が一番幅広い平坦面をもち幅250mを測るが、これより西では二つに分れ、約1kmでフォッサマグナの西縁である糸魚川——静岡構造線の断層崖に沿って北へ流れる宮川によって断ち切られる。東はいったん瘦尾根となって再び広がりを見せる。遺跡は中央道の事前調査が行なわれるまでは、落葉松・松・サワラ・雑木などの山林であり、後世の擾乱を受けない非常に良好な状態で保存されていた。

八ヶ岳西・南麓一帯の尾根には、縄文時代を中心とした遺跡が数多く埋藏されており、この阿久遺跡の周辺にも大小様々な遺跡が分布している（第1図に主な遺跡を示した）。なかでも前尾根・居沢尾根・大石・山の神とこの阿久遺跡は、それぞれ時期は異なるものの、現状ないしは馬蹄形をなす大集落跡であり、「阿久遺跡群」を代表する遺跡といえる。



第1図 阿久遺跡の位置と付近の主要遺跡(2万5千分の1)

1. 阿久 (阿久石跡・縄文中期)
2. 柏木南 (柏木石跡・縄文中期)
3. 前尾根 (縄文中期)
4. 居沢尾根 (縄文中期・平安)
5. 大石 (縄文早期～中期・平安)
6. 山の神 (縄文中期・後期)



第2図 第5次調査の発掘区設定

2. 範囲確認調査とその成果

(1) 試掘グリッドの設定

今調査の主要目的である遺跡範囲確認のための試掘グリッドは、長野県中央道遺跡調査団が設定した地区割をそのまま踏襲した(第2図)。すなわち、中央道のセンター線のうちSTA234と235を基準点とし、その2点を結ぶ直線を基準線として、東西200m南北50mの大地区を設定し、大地区の中を更に2×2mの小地区に分割するものである。これによって中央道遺跡調査団では、北斜面から南の阿久川までA~Gの7地区を設けたが、今回の確認調査では更に広範囲の試掘が必要なため、西側にH~N区、東側にO~V区を、またA区の北にX区、H区の北にY区をそれぞれ新たに設定した。基準方眼となる小地区は、東西方向は東側から算用数字をふり、南北方向は北側からアルファベットを用い、それぞれ例えば「BG26」のように表記される。これは、大地区B区の中のG26小地区を表わす。

さて実際の発掘区は、中央道西側部分については、本線分の調査で確認されている「環状集石群」の広がりや連続性を調べるため、予想される地域にトレンチを何本か設定した。その他の部分には2×2mのグリッドを設定、必要に応じて拡張した。東側部分については環状集石群の範囲外であるため、地形や立木を考慮して全域に10~24m程の間隔で2×2mのグリッドを設定した。

最終的に、西側が58、東側が26の合計84グリッド(336㎡)を調査した。

(2) 土層

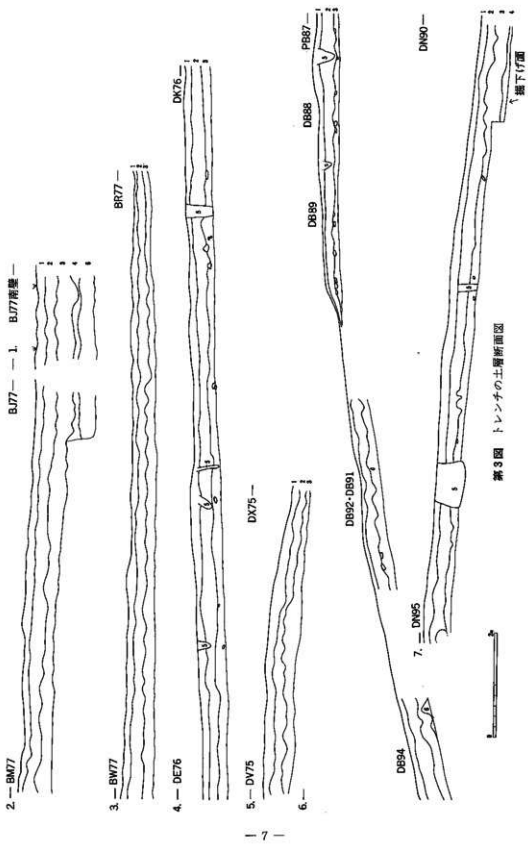
今回は範囲確認調査という性格上、遺構が確認された時点でそれ以下の掘り下げを中止しているため、黒褐色土下層で掘り下げを止めた発掘区が多い。第3図に示した2~7の土層断面図は、中央道本線部分の西側に、北西-南東方向に設定した4本(図2~5)と北東-南西方向の2本(図6・7)のトレンチによるものであるが、いずれも黒褐色土下層までの層序を示してある。尚、BJ77グリッドにおいて深掘りを行ない、ローム層までの基本層序を確認している(図1)。

その結果は以下のように、中央道本線部分の調査における層序と基本的に異なるものではなく、上位から黒色土(表土)層、黒褐色土層、漸移層、ローム層の4層から成っていることが確かめられた。なお、黒褐色土層については、上・下2層に分けて捉え、遺物も別々に取り上げている。

1層(黒色土層)——いわゆる表土層

2層(黒褐色土上層)——3層より軟かくもろい。しまりもない。

3層(黒褐色土下層)——2層と比較して固くしまっており、より褐色味が強く明るい。



第3図 トレンチの土層断面図

4層(漸移層)——ローム層からの漸移層。

5層(攪乱層)——木根等による攪乱層。

6層(ローム層)——いわゆるソフトローム層。

遺物の包含層は、1層の黒色土層と2層・3層の上下黒褐色土層であり、主として黒褐色土層に集中した。また、散在する集石群の礫は3層に多く包含され、「核となる集石」(No.270・271)も3層中に検出された。

(3) 遺構の検出状況

特に、阿久遺跡のもつ性格上、その範囲確認調査にあたっては次の2点に留意してグリッドを設定した。その1点は遺跡の範囲を確認することであり、もう1点は、環状集石群という本遺跡のもつ特徴的かつ、かつてなかった程の規模の遺構の広がりを知るというものである。後者が前者と深く係わるものであることはいうまでもない。

南東側の調査では、FD24グリッドに、完形土器(いわゆる中越式土器)を伴う住居跡の存在が確認された。これは現在のところ縄文前期の阿久集落ではその東端に位置するものと考えられる。北東に設けた13個所のグリッド(BG26、BS13・25、BT34、CJ11・25、CK11、DD11・24、DR11、DS24、DY11・24)からは、ほとんど遺構の検出はみられなかった。このことは、中央道ルート内に集中している遺構の限界を示しているものと考えたい。尚、斜面にあるBG26・BS13・25、CJ11、CK11から地山に自然礫が多数出土した他はこの北東側での集石の存在は確認されていない。

中央道本線西側についてみてみたい。ここでは集落の広がりと共に、環状集石群の範囲という点で注目される。さて、その礫の広がりであるが、尾根上の平坦面では設定したグリッドのほぼ全面よりその存在が確認できた。しかし、尾根の最も南の端と南西の端に設定したEF76～EG76、また、JL2・JS2・DB4・BM99・DN99各グリッドからはそれが全く認められなかった。すなわち、集石は尾根上の平坦面いっぱい分布し、阿久川への斜面にはみられないのである。(中央道の報告書—原村・その5、付図2、阿久遺跡環状集石群全体図を参照していただきたい)。このことは、その限界を知る意味で貴重な資料になるものと考えられる。また、西の範囲では、BJ77～BM77で礫が検出されているが、それ以西のグリッドでの存在は認められなかった。従って、ここを西の限界と考えることができよう。こうして「環状集石群」は予想通り長軸(東西)140m、短軸(南北)120mの環状に分布していることが判明した(第4図)。ただし、未調査部分があるため、馬蹄形となるかどうかは今のところ不明である。

さて、BM77とDN78グリッドでは、環状集石群の核となる「集石」とされる遺構が検出されている。これは、中央道の報告書中で「石の集合した遺構」という意味で用いられているものである。中央道の報告書中では、さらにその形態分類を細かく行なっているが、

今調査ではそれを完掘した訳ではなく、その平面形を確認するに留まっている。従って、平面形に関する限りBM77のそれはその分類に従うと、規模では短径が130cmをこえるAに、また、平面形では円または楕円形であるIに属する(図版1の3)。これは270号集石と命名されており、集石群の最も西側に位置するものである。合わせて貴重な知見であることを述べておきたい。また、DN78の271号集石は平面形が不定形のIVに属するものである。

(4) 遺物の分布範囲

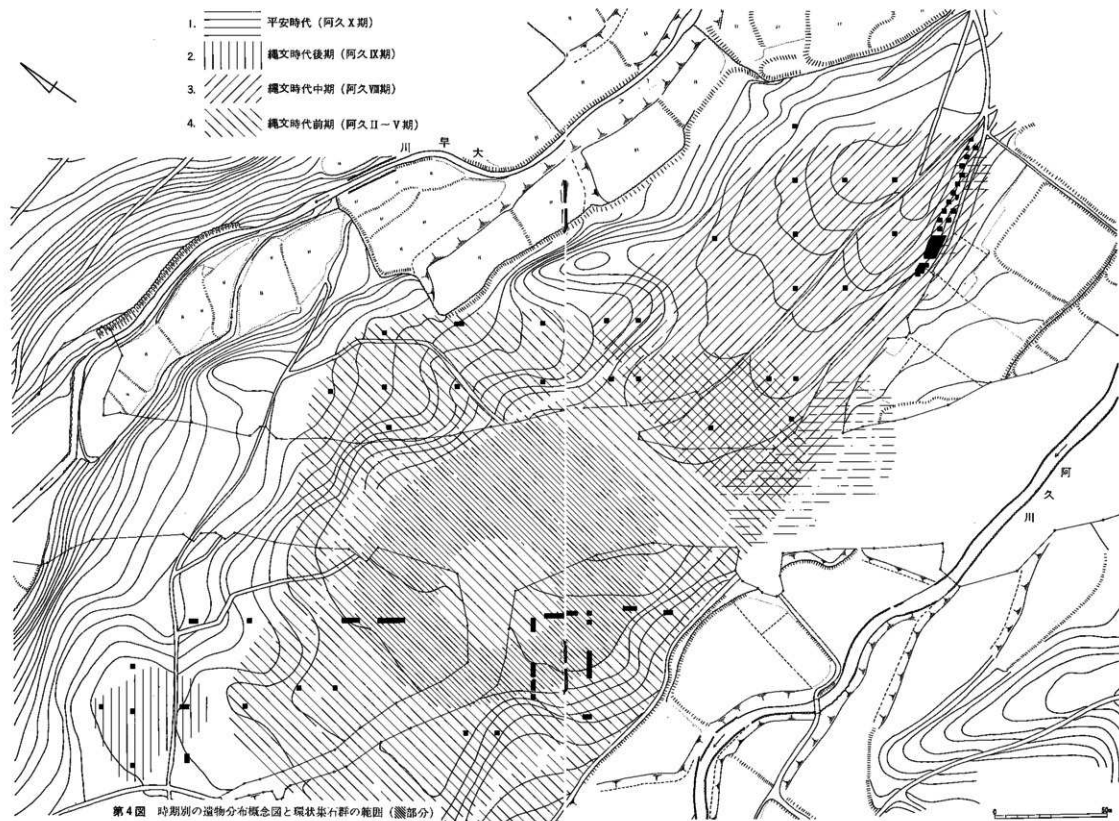
遺物の総数は5211点、その内訳は土器片4006点、石器1202点(原石・剥片等を含む)、石製品2点、炭化物1点となっている。試掘を実施した84グリッドのうち、何らかの遺物を出土したのは89%にあたる75グリッドであった。保存のための範囲確認調査という性格上、ローム層下まで掘り下げることはせず、遺構が確認された時点で止めたグリッドが多いため、ここでは大きく縄文前期、中期、後期という3時期に分けて遺物の分布状態をみることにする(第4図)。なお、石器は帰属時期を厳密に特定することがむずかしいため、時期の明らかな土器片を中心として述べたい。

前期の土器は、遺物の項で述べるが、第4次調査までに出土した各型式の土器片がほとんど出土している(図4)。特に関山式併行期(阿久第II期)から諸磯b式期(同V期)にかけての土器片が最も多い。一方花積下層式期(I期)と十三菩提式期(VI期)はごく少なく、諸磯c式期(VI期)の遺物は発見されなかった。

II期からV期にかけての遺物は、環状集石群のある部分を中心にしてその周辺に広がり、尾根上の平坦部から斜面にかけて広い範囲に分布している。西はAM96グリッドを限界とし、東はEP35・FD24グリッドが東限であってここより東側は中期の遺物と交代する(後者の2グリッドは中期の土器片と重複する)。南と北の斜面からは、1~10点という少ない土器片の出土があるが、上部からの流れ込みも考えられる。これに対して平坦部に設けたトレンチからは1グリッドにして32~271点という多くの土器片が出土している(III層まで)。III期~V期の土器片は基本的に中央道の報告書(原材その5)におけるグリッド出土遺物の考察と矛盾することなく、集石の分布と重複する傾向が捉えられた。

中期はEP35・FD24グリッドで前期と重複するが、これ以东は中期一色となる(図3)井戸尻式土器が最も多く、九兵衛尾根式、藤内式の土器片も若干出土している。分布範囲の東限は、斜面のTJ68グリッドに一点の出土もないが、南東部の尾根上に若干のびる可能性もある。また、北側のDR11・DY11グリッドからは110点・64点という多量の井戸尻式期を中心とした土器片が出土しており、この凹んだ斜面はこの時期のゴミ捨て場であったことが考えられる。

中央道の調査では藤内式期と曾利式期の住居址が各一(8号・10号住居址)、第6次調査では井戸尻III式期が一軒(101号住)発見されているが、いずれも南斜面からである。今回も尾



根上からは遺物の出土のみで、住居址等の存在は確認されなかった。

後期(掘ノ内式期)の土器片は、阿久尾根の先端が北側へ突起状に分れた小テラスの平坦部に、やや集中して発見された(図2)。前期の分布域とは重ならず、小規模な遺構の存在が推定される。この時期の土器片は、本線部分調査の際には全体(特にE区とF区)に散在した状態で発見されている。

以上のように、阿久尾根では大雑把にみて3時期(今回は発見されなかったが、平安時代を加えると4時期)の遺物が、若下の重複はあるものそれぞれ場所を違えて分布していることが指摘されるのである。

3. 出土した遺物

(1) 石器

出土した石器は、総数1202点ある。この内訳は石鏃44、石錐14、石匙8、複数挟入石器2、ピエス=エスキーユ18、調整ある剥片・使用痕ある剥片12、磨石・凹石22、黒曜石原石・石核・剥片1049、チャート剥片12、その他の石片21となっている。以下、主なものについて説明を加えたい。

石鏃(図版2の2、1~11) 2と8が頁岩、12がチャート製の他は黒曜石製である。いずれも無茎で円基の石鏃である。

図版2の2、12~18については、どれも尖頭部を作り出すため左右両辺からの調整と、下辺に挟り込みを入れるための調整がみられるが、途中で中断されている。調整剝離は荒く、不規則なものが多い。ここでは一応、石鏃作成時の失敗品として捉えておきたい。

石錐(図版2の2、19~28) 20・22・27はチャート、23・26は頁岩、残りは黒曜石製である。22・24・27・28は錐部の先端を欠く。形態的には、全体の形が棒状をなすもの(19・20・22・23)とつまみ状の頭部を有するもの(21・24~28)に分類することができる。いずれの石錐にも肉服では先端の使用痕を確認できなかった。

石匙(図版2の2、29~36) 29・30は頁岩、31・33はチャート、34は安山岩、32・35・36は黒曜石製である。33はいわゆる「つまみ」を、34・35も肩部を欠損している。形態は従来の分類法によれば、縦型(29・30)と横型(31~34・36)に2分類される。35は破損のため不明である。縦型の2点(29は長さ5.5cm)は片刃の刃部をもち、刃縁部分以外にはアク状の付着物がみられる。横型は、33・36の肩部が両面調整であるのに対し、残り3点は刃部のみ片刃調整を加えている。36は極端に小さく、左右が1.4cmしかない。

複数挟入石器(図版2の3、1・2) 諏訪市の千鹿頭社・十二后遺跡で把握された新しい器種の石器の範疇に入ると思われるものである。しかし、二造路例と比較すると薄く小さな剥片を素材としており、挟り部のチッピングも弱い。黒曜石製である。

ピエス=エスキーユ (図版2の3、3~19) 両極打法によると思われる剥離面をもつ石器である。22点が把握されているが、通常の石核と区別のむずかしいものもあり、確定的な数ではない。すべて黒曜石製である。

使用痕ある剥片 (図版2の3、20~28) 剥片の一边に刃こぼれ状の微細剥離のある石器である。26~28はノッチ状を呈している。

石核 (図2の3、29~31) 3点とも黒曜石製。今回の調査で出土した黒曜石の石核や原石は転石を素材としているが、小さいものが多く、大きいものでも鶏卵大を越えない。29・31からはある程度定形的な剥片を何枚か剥離しているが、多くは無作為に原石をたたいている。

以上、小型石器等についてみたが、これらの小型石器の製作にともなって出たものと思われる石屑の類が膨大な量出土している。その石質別割合は黒曜石が99%に対してチャートが1%とほとんどが黒曜石である。ところが石楯の場合、黒曜石88.6%、チャート6.8%、頁岩4.6%の割合であり、石錐は黒曜石57.2%、チャート21.4%、頁岩14.3%、その他7.1%、石匙となると黒曜石37.5%、チャート25%、頁岩25%、その他12.5%と、黒曜石の比率が下がる。(3図3)これについては、中央道の報告書の指摘とも一致し、興味深い事実といえよう。

磨製石斧 (図版3の1、1~3) 1は輝岩製の乳棒状磨製石斧の完形品である。横断面形は凸レンズ形で両辺に稜線をもつ。全面が研磨されている。2は緑泥片岩製、3は輝緑凝灰岩製、いずれも破損品である。

いわゆる打製石斧 (図版3の1、4~10) 4・9は硬砂岩、5・8・10はホルンフェルス、6・7は緑泥片岩製である。6・10は基部を欠損する。

磨石・凹石 (図版3の2、1~7) すべて輝石安山岩製である。1は磨石で、図示した面がふくらみ、磨られている。2~7は凹石であるが、その凹穴は打痕による。5は連続する長い凹穴が裏面にもみられ、下辺は磨られている。

(2) 土器

今回の調査で出土した土器は4006点である。そのうち器形をうかがうことのできるの是一個体(図版4の3)のみで後はすべて小破片であった。以下、その主なものについて、時期別に簡単に説明を加えることにする。なお、時期区分、および土器の分類基準等は中央道の報告書(原村その5)に依った。

I期以前-花積下層式期以前(図版4の1、1~3)

1は厚手で、大粒の長石と石英を多量に含んだ楕円型土器である。T J 92グリッドから出土した。2、3はともに胎土中に繊維を含んでいる。2は磨滅が著しく文様は不明である。II期I群Bの可能性もある。

Ⅱ期一関山式併行期（図版4の1、4～13、16～18、図版4の3）

4～10はⅡ期Ⅱ群（関山式）である。このうち4、6、7は同一個体であろう。内面はていねいにナデられ堅緻で残存状態は良好である。施文されているループ文もはっきりしている。

8は頸部付近の破片である。ループ文との境にはへら状工具で細かく刻まれた微隆起状の横帯文がめぐる。9、10にはコンパス文が施文されている。10の内面にはタール状のこげつきが認められる。

11～13はⅡ期Ⅰ群A（いわゆる中越式）である。11は細い半截竹管による連続刺突文が右から左へ斜めに施されている口縁部破片である。口唇は鋭利なへら状工具による刻みがある。口は細い棒状工具により不規則に連続刺突されている。やはり口唇にへら状工具による刻みがある。11、12の様な文様はⅡ期Ⅰ群Aの中では珍しく、本調査でも64号住にみられる程度である。13は鋭利なへら状工具による格子目文である。施文順序は、同類の多くがそうである様に左上→右下が先で、右上→左下が後である。

16～18はⅡ期Ⅰ群D（神ノ木式）である。いわゆる神ノ木式のメルクマルとされる、節状工具による連続刺突文が施文されている。

図版4の3は、Ⅱ期Ⅰ群Aで中厚手、赤褐色を呈し、この期の典型品といってよい。表面胴部から下におこげが観察される。なお、この土器は出土状態から推して住居址遺物の可能性が高い。Ⅱ期の集落の東限を知り得るという意味で重要な資料である。

Ⅲ期一黒浜式併行期（図版4の1、14・15、図版5の1、2）

図版5の1はⅢ期Ⅱ群（黒浜式）である。1は平行沈線文とコンパス文が横位にめぐる。3～8は縄文地文に平行沈線と連続爪形文を施文したものである。1～8はいずれも内面はていねいにナデられている。なお6の爪形文の向きが注意される。同一方向の平行沈線上を互いに逆方向の爪形文で施文している。これは、単に爪形文の向きだけで施文した人間の右ききか左ききかを云々するのはあまりにも短絡的すぎるということを教える好資料である。

9ももちろん繊維土器であるが、他と違い内面は粗いへらナデ痕が著しい。単節の羽状縄文が施文されている。

図版5の2はⅢ期Ⅰ群である。無繊維で、内面に指頭圧痕を残し、胎土に雲母を多く含む縄文のみが施される特徴ある一群である。概して縄文のころがしは粗雑である。1～4は口縁部である。

図版4の1、14・15は胎土、色調、内面にみられる指頭圧痕等からⅢ期Ⅰ群の範疇に入ると考えられる。ただ、Ⅲ期Ⅰ群土器には、いまのところ縄文以外の文様をもつ土器が極少数の破片でしか確認されておらず、その点で問題が残る。14は単節LRの縄文地に太めの半截竹管による押し引き文が横位に二列めぐっている。口縁直下約1cmはナデにより縄文

が消えている。15もやはり口縁部片で、14同様口縁直下約1cmはナデられて単節縄文は消されている。

ヘラ状工具による沈線が横に一本走り、さらにその境を下方から上ってきた刺突が付加された沈線は横沈線と接して屈折し斜め下方へと進んでいる。この14、15の2片は、Ⅲ期Ⅰ群土器の本質を究明していく上で重要なカギを握る貴重な資料といえる。類例の蓄積が待たれる。

Ⅲ期—関西・東海系（図版5の3）

概して薄手で堅緻な、いわゆる関西・東海系の土器である。1は表面にのみ条痕がみられる。2は斜行沈線文である。貝殻腹線によるものであろう。内面には成形時のオサエ痕が顕著に残されている。3、4は幅広の爪形文、5～7は平行沈線にC形爪形文がプラスされたものである。5は波状の口縁部で口唇には爪形文が密に刻まれている。8～11は単節縄文のみられるもの。12は頸部片で、屈折部には横位に連続爪形文が施された隆帯がまわる。13・14はやや内彎ぎみの口縁部である。口縁直下にはヘラで斜めに細かく刻まれた横帯文がめぐり地文に単節LR縄文が施されているが口縁より下方約2cmはナデられて消えている。その境部分には左上がりの斜めヘラ切り文が密に施文されている。なお表面には炭化物が付着している。

Ⅳ期—畿内a式期（図版6の1、1～16）

1～3は櫛状工具による集合沈線で、横位の直線または波状文が描かれている。4～8及び16はⅣ期でも古い部分に位置づけられる一群で、胎土中の雲母、半截竹管の押し引きにより加飾された隆帯文、同じ技法による口唇の施文、やや乱れたコンパス文による肋骨文モチーフの描出等を特徴とする。この一群は関東地方にはみられない在地的な土器で、当地方の諸畿a式段階の標式資料となるであろう。

Ⅴ期—畿内b式期（図版6の1、17～23、図版6の2、1～8）

17、18、22、23は、爪形文系土器で、編年的に古い部分に位置づけられている一群である。18はあまり類のない口縁部破片である。幅広の爪形文を密に横方向に幾列もめぐらした後、その上を背竹管を使ってやや粗く横方向に連続刺突している。21は断面把手のついた沈線文系のキリバー形深鉢の口縁部である。表面にはこげつきが顕著に認められる。

図版6の2の1～8は浅鉢の破片で、1～4、8は口縁部である。いずれも有孔浅鉢とみられ、焼成前の孔が観察できる。

Ⅵ期—十三善台式期（図版6の2、9～15）

9～11は半截竹管を連結させて施文したと考えられる結節沈線の弧状文が描かれている。3片はおそらく同一個体であろう。内面にはおこげが著しい。

12～15は半截竹管による集合沈線で、直線あるいは曲線文が表わされている。12、13は波状となる口縁部である。いずれも内面はていねいにナデられている。

IX期—後期(図版6の3)

後期前葉の堀ノ内式に比定できる土器である。1、2は竹管の背による太くて深いしっかりした沈線によって区画された中に単筋縄文が残る。いずれも内面には炭化物が付着している。同一個体であろう。3-9は比較的ていねいにナデられた器面に1、2と同様なしっかりした沈線が直線で縦、あるいは横に引かれている。同一個体とみられる。3は口縁部で、補修孔が開けられている。

(3) 石製品

石製品としたものは、丸玉と、块状瓦飾りの2点である。

丸玉(写真2の1)は、滑石製で、半面が欠損している。直径1.2cm。欠損部の観察はでき得ないが、現存する部分からすると、片側からの穿孔である。DG76グリッドから出土した。

块状瓦飾り(写真2の2)もやはり滑石製品である。片側が欠損している他、かなりの破損を受けている。DN76グリッドより出土した。

いずれも集石中より出土しているものである。

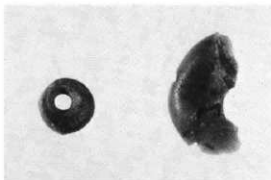


写真2 石製品(丸玉・块状瓦飾り)

IV 結 び

第5次調査は、真夏の猛暑と土煙の中の大変な調査であった。試掘グリッドも広い範囲に散在していたため、いろいろと不便もあった。グリッド設定にしても林の中で、下ヤブをいちいち刈るなど手もかかった。

しかし、皆の念願であった保存問題にも一応の決着がついた後であり、今度はこの阿久を永久に子孫に伝えるための確認調査であるから、気分も違っていたと思う。それぞれ「名譽と誇りを信じて」(調査ニュース「裾野」7号、宮坂副団長の言葉)調査に取組んだのではなかっただろうか。

時を同じくして、本線部分の第4次調査を行っていた中央道遺跡調査団とは作業員の方々も、昼食も、お茶もいっしょで和気あいあいと作業を進めることができた。また、諸事にわたってご協力いただいたばかりか、土日の休みを利用して作業を手伝って下さった。その情熱に深く感謝申し上げたい。

本報告書は十分な考察も出来ず、概略しか報告することが出来なかった。今後、遺跡の

整備を行なっていく中でその責をはたしていきたいと考えている。

参考文献

- 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——原村その5 昭和51・52・53年度——』
日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 1982年
- 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——諏訪市その3——』 日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 1975年
- 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書——諏訪市その4——』 日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会 1976年



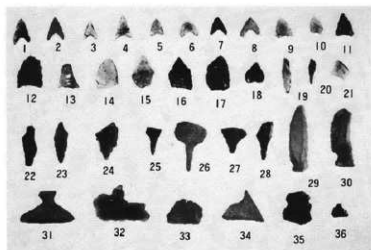
1. 発掘風景



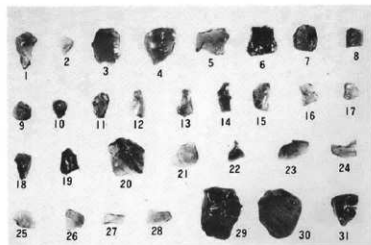
2. 散在する集石の出土状態(BR77~BW77グリッド) 3. 270号集石と付近の礫(BJ77~BM77グリッド)



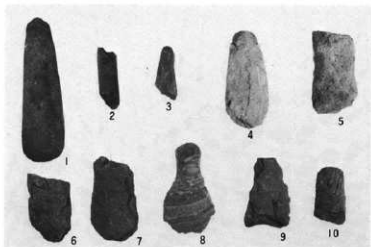
1. 土層断面(BJ77グリッド)



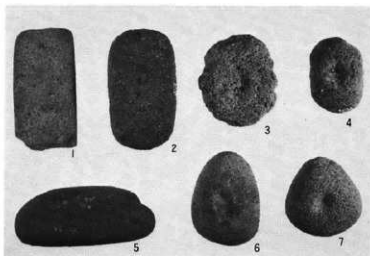
2. 出土した石器
石鏃(1-18)・石錐(19-28)・石匙(29-36)



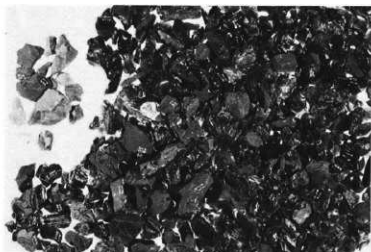
3. 出土した石器
複数挟入石器(1・2)
ピエス=エスキーユ(3-19)
使用痕ある剥片(20-28)
石核(29-31)



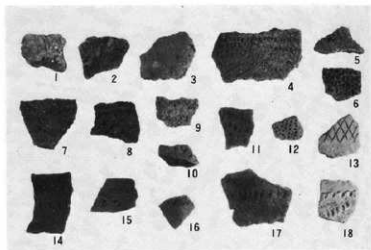
1. 出土した石器
磨製石斧(1-3)
「打製石斧」(4-10)



2. 出土した石器
磨石(1)
凹石(2-7)



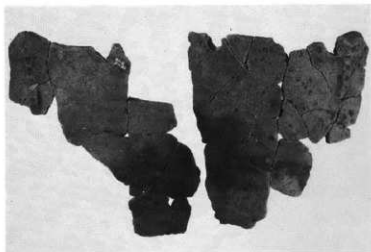
3. 出土した石器
黒曜石原石及び
矽片とチャート矽片(右下)



1. 出土した土器片
(阿久第Ⅰ期以前～
同Ⅲ期)

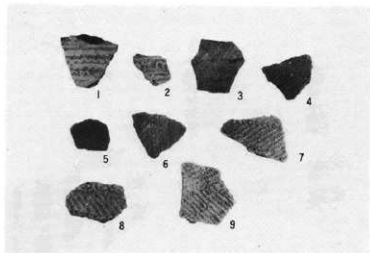


2. 一括土器出土状態
(FD-24グリッド)

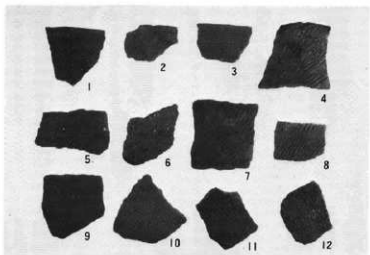


3. 同接合状態
(阿久第Ⅱ期)

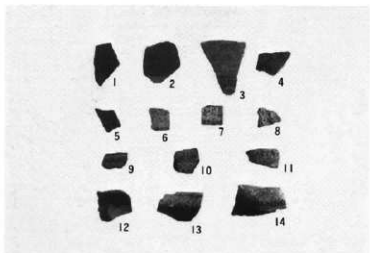
図版五



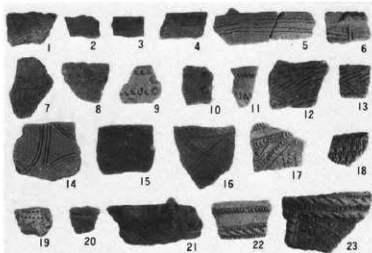
1. 出土した土器片
(阿久第Ⅲ期)



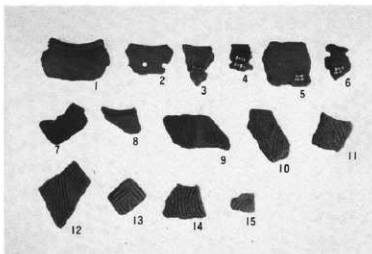
2. 出土した土器片
(阿久第Ⅲ期)



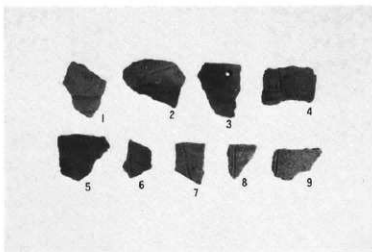
3. 出土した土器片
(伊群)



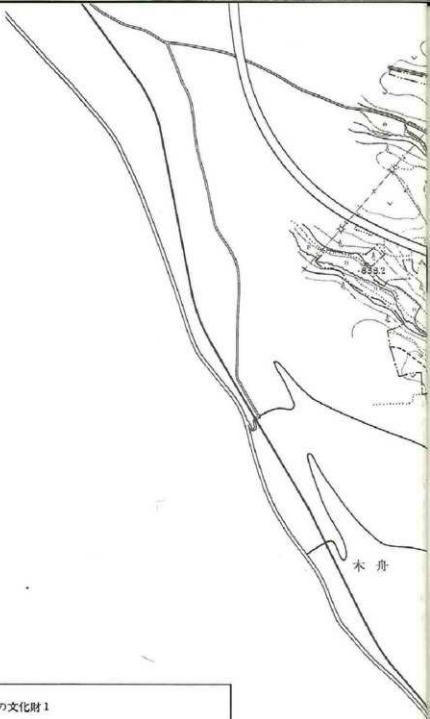
1. 出土した土器片
(阿久第IV・V期)



2. 出土した土器片
(阿久第V・VI期)



3. 出土した土器
(阿久第IX期)



木舟

原村の文化財1

阿久遺跡 (第5次調査)

—重要遺跡範囲確認緊急調査報告書—

発行日 1979年3月25日

発行 原村教育委員会

